

## 煉瓦造りのお伽の城で

—大塚移転当時の附属幼稚園—

### 中島國太郎

三月半ばのことであった。今年はまだ風が冷たく、木立ちの風情も寂しげなこの日、私はお茶の水女子大学を訪れた。

正門左手の附属小学校は帰国子女学級の増設で慌ただし、徽音堂に続く正面の広い道もまた、大学の下水道工事とやらでごった返していた。荘麗な徽音堂に向かって左に折れ、附属幼稚園の古風な煉瓦造りのたたずまいを目にしたとき、そこには昔日の落ち着いた女高師があり、私の思いは、にわかには五十年近い幼稚園時代に遡っていった。

昭和八年一月、私たちは前年通ったお茶の水のブラック園舎を去り、西洋のお伽の城のような新しいこの幼稚園に移り、通い始めた。本校と同じ八咫鏡をバックに「幼」の字を記した徽章を帽子につけ、お弁当を入れたバスケットを片手

に下げたエプロン姿の私たちは、徽音堂を右手にしたこの道の突き当たりである昇降口から、幼稚園の中に吸い込まれていった。

昇降口で上履きに履きかえると、付き添い人は右手の控室に姿を消し、私たちは遊戯室に向かう廊下に足を踏み入れ、いったん右手の帽子掛け室でバスケットなどを置いてから、教室に入っていた。私は初め林の組、それから池の組となったが、どちらも遊戯室に近い奥の方であった。教室では、受け持ちの及川ふみ先生をはじめ何人かの若い先生方が、快く私たちを迎えて下さった。

天気の良い日などは、教室から下履きに履きかえてすぐに園庭に飛び出し、砂場やブランコ、スベリ台などで遊んだ。ブランコの隣にあったジャングルジムは当時としては珍しいもので、これに登っての鬼ごっこなど、本当に楽しかった。

先生の「お入り」の合図で教室に戻ると、そこでは別の遊びの世界が待っていて、思う存分、自分の好きなことに浸ることができた。

中でも記憶に鮮明なのは「観察絵本キンダーブック」である。大判のこの絵本には、私たちの好奇心や知識欲をそそる絵が沢山描かれていた。何冊も備えてあったキンダーブック

の、ページを繰るたびに味わった胸のときめきは、今でも忘れられない。

「ぬりゑ」も楽しかった。クレヨンや色鉛筆で一心に絵を塗りつぶしていくうちに、綺麗な絵が出来上がっていった。そのころのデパートの文房具売場には「及川ふみゑがく」と記された「ぬりゑ」があった。

私の記憶の中にある及川先生は、恰幅のいい先生で、たいいてい着物姿で、小さな椅子にどっしりと腰を下ろし、私たちと同じように、粘土や黍殻細工や、切り絵などをなさっていらっちゃった。口数は少なく、何か言われてもそれは重々しくゆっくりと話されたので、私たちの組のボスであった五郎君も、先生から「五郎ちゃん」とたしなめられるのがいちばん苦手だったようである。

そんな及川先生も、遊戯室では若い先生と一緒に、私たちの遊戯の仲間入りをして下さった。五月の節句を控えて、「キンタロウ」の「おゆうぎ」を習った。「マサカリカツイデ キンタロウ……」の、「おゆうぎ」の歌も仕草も、まだ記憶に新しい。

今再び附属幼稚園の教室に臨んで、その昔、バスケットの中のお弁当を頂いた椅子や机が、五十年近い現在でも使われ

ているのを見てびっくりした。教室の組の名前を表したステンドグラスが、当時の姿そのままに残っているのも懐しい。お茶の水の幼稚園の歴史はそのまま我が国の幼稚園の歴史につながると言われているが、そのことを目のあたりにした思いがする。

私が東京高師の生徒であったころ、実演童話のクラブ「大塚講話会」に所属していたので、「一度話を子供たちに」と及川先生に言われ、遊戯室で園児に「おはなし」をしたことがあった。その時園長室で、倉橋惣三先生にお会いすることができた。確か昭和二十三年ごろのことであった。

幼稚園で堀合先生にお目にかかっているうちに、こんなにいろいろなことを思い起こすことのできた私は、及川先生と御一緒に私たちを導いて下さった菊池フジノ先生にも、三月末にお目通りすることができた。お茶の水幼稚園時代に先生が工夫された誘導保育のことについて語られる菊池先生の瞳には、八十歳近い方とは思われないほどのキラキラとした輝きが見られた。

あの煉瓦造りのお伽の城での生活は、今すぐに再現できるほど楽しいことばかりだったのである。

(東京都立教育研究所)